日本中國學會報　第六十七集
二〇一五年十月十日　發行　抜刷

沈從文の沈默と漂泊

――日中交戰時期の中學國語教科書編纂事業について――

今泉秀人

日本中國學會報　第六十七集　一九二

沈從文の沈默と漂泊

——日中交戰時期の中學國語教科書編纂事業について——

今泉秀人

序　沈從文と國語教科書編纂事業

一九三一年八月から新文學創作の講師として國立青島大學に赴任していた沈從文は、同大學學長を三二年に辭職した楊振聲の慫慂に應じて大學を離れ、三三年秋から國語教科書の編纂に參畫することになった[1]。

商業的な利益が著者に分配される公正な出版システムが未整備だった一九二〇年代の中國において、長い閒職業作家の不安定な地位に甘んじてきた沈從文は、國民革命後の民國社會における「新文學アカデミズム[2]」の勃興を背景として大學での職を得、ようやく生計を安定させたのであったが、ここで生活の基盤を楊振聲の主宰する國語教科書編纂事業の上に移すことになったのである。

その直接的、外在的な理由は、青島大學に沈從文を招き入れ、彼の後ろ盾となっていた楊振聲が、大局としては滿洲事變後の社會情勢の變化によって學長職を退かざるを得ない情況[3]に陷ったためであった。こうして、いわば人閒關係の成り行きから大學を離れた沈從文だったが、彼がなおも楊振聲に從って、制度としての國語を選別する場である、政府による教科書編纂事業という經綸の世界に足を踏み入れたことの內在的な要因としては、國語と學校制度が絡み合いながら伸長していった中國の近代文學發展時期にあって、アカデミックな背景や經歷を有しない沈從文が、文才を高く評價され作家としての「自負」を膨らませる片方で、その裏側に、實は學歷に根ざす「自卑」を抱いていたことが考えられる。この「自負」と「自卑」が背中合わせとなった複雜な意識ゆえ（いわば逆說的に）彼は國語を媒介とした國家政策への直接的關與とも言える教科書編纂事業に手を染めていったのではなかったか[4]。

この國語教科書編纂事業は、楊振聲（國防設計委員會文化教育組委員）、沈從文（專任）、朱自清（清華大學教授・兼任）という三人の作家によって始められ、一九三六年八月には『小學校高級用實驗國語教科書』（全四冊）が教育部「國立編譯館主編」として發行された。この事業を楊振聲に委託した國防設計委員會は、滿洲事變後「安內攘外」策を採っていた蔣介石が一九三二年、國民政府參謀本部內に祕密裏に設置した對日工作と國民國家建設のためのシンクタンク機關だった。しかし一九三五年には資源問題に特化され、表立った公的組織である「資源

委員會」に改組されている。[5] よって彼らの教科書編纂事業がそれ以降どこから經費を得ていたのか、ということは當時の沈從文の社會的身分に關わる問題となろう。

これを考えるに、二つの手がかりがある。一つは、『小學校高級用實驗國語教科書』第一册表紙裏の端書[6]から考えるに、教育部が途中からこの教科書編纂事業委託の主權を引き繼いだのであろうという察しがつくこと。もう一つは、朱自清の日記（一九三六年六月二十七日）に、「午後街へ出る。南方から歸ってきたばかりの沈從文と會う。彼が言うには、楊〔振聲〕が教育部を代表して、正中、商務、中華、世界と契約を結んだということだった。なんでも四つの出版社はこれから五年間毎年編集費として二萬元を提供するということだ[7]」と記されていることである。この契約は小學校用の次に計畫されていた中等學校用教科書の編纂に關するものであったと考えられる。

以上二點を信ずるとすれば、彼らの國語教科書編纂事業は、一九三六年に小學校用が出版された頃、新しい段階へ入っていったと言えよう。つまり、それまでの國防設計委員會という保密を要する特殊な機關の管轄から、國民政府教育部による正式の事業となり、なおかつまたそれゆえ民間の大手出版社連合から潤澤な資金を得られる五年間が始まったのである。[8] 彼らの教科書編纂事業は實際に少なくとも一九三九年十月頃まで續けられた。

本稿は、一九四〇年代の沈從文にアプローチする大前提として、彼がそれ以前の六年間に携わった教科書編纂事業の後半時期、つまり上述した三六年から三九年までの、中學用國語教科書編集を行っていた期間に注目する。「日中交戰時期の」と副題を付けた所以である。日中開戰という民國社會の歴史的轉換期に彼が何を思いどのように生きたのかについて、教科書編纂事業との關わりを中心として述べてゆく。そして當時の沈從文の社會的身分を規定し、同時に經濟的基盤となっていた教科書編纂事業が彼に何を齎したのか結論づけてみたい。

一　沈從文の評論活動

まず最初に、沈從文が教科書編纂に關わった時期（一九三三～三九年）全體を一九三〇年代という文脈からとらえ、この間の作家としての彼の狀況について整理しておきたい。

一九二三年の故郷湘西から北京への出立を起點とし、人民共和國建國前夜に政治的批判を受け、その直後に筆を擱くまでの四半世紀は、沈從文の「創作家」としての前半生にあたる。その創作は二〇年代北京における習作期から多產を極めたが、國民革命後出版の中心地となった上海へ移り三年間の試行錯誤を經て、一九三一年からの青島大學での創作教學の經驗を重要なステップとし、次第に作品の完成度を高めていった。そして教科書編纂事業のため一九三三年に再び北京に居を定めてからは、いよいよ圓熟した筆致で大輪の花をいくつも開かせる。一九三四年には中編小說「邊城」を書き上げ、『從文自傳[9]』を出版した。さらに翌年にかけては、後に『湘行散記』としてまとめられる一連の紀行文を陸續と發表していく。現在これらはすべて作家沈從文のみならず中國現代文學史におけるそれぞれのジャンルの代表作とみなされている。いずれも讀者を湘西という「ある靜謐な太古の世界[10]」へ誘い、その風景や民俗・人情を、現代中國語によって中國人にとってのいわば〝忘れえぬ〟記憶として定着させた珠玉の名品と呼ぶにふさわしい。後年彼自身が「〔一九三一年から三七年までの間は〕まさに私の習作が相當成熟した時であって、私の一生で生命力が最も旺盛

な數年間だった[11]」と認めたように、三〇年代は沈從文の創作活動の高潮期であった。

創作の充實と共に三〇年代の沈從文の文學的營爲を特徵づけているのは評論的作物の增大である。この頃は作品への高い評價によって沈從文の「文壇」における影響力も大きくなった時期であった。

その時代的背景としては、まず一九二七年の反共クーデターによる國共の分裂を經て政黨間の思想的な對立が社會に直接の影響を及ぼすようになり、作家・知識人が國民意識を先導する時代の先覺者、世論を動かすオピニオンリーダーとしての役割を擔った、あるいは擔わされた結果、特に二〇年代末からは、彼らの發言がしばしば黨派性を帶びたものとして注目されるようになっていたことが擧げられる。また教育制度の伸展による、國民革命後の讀者人口の增加と、都市化によるメディアの發達が、特に上海において文學を急速に大衆化・商業化させたことで、いわゆる文藝論爭が「センセーショナルな話題[12]」となり盛んに消費されるようになったことも重要である。そして中華民國が國民國家としての試練のさなかに置かれることになった滿洲事變後の歷史的情況の中で、作家が「書くこと」の意味は、政治的な磁場の影響を更に强く受けることになっていった[13]。

沈從文の側から彼の評論的作物とこれらの背景との關係を示せば、一九三三年から三六年頃まで楊振聲と共に『大公報』という全國性を持つマスメディアの文藝副刊の主編となって紙面を切り盛りする立場[14]にあり、自己の文學觀を體現すべく、北京を中心として、藝術性の高い原稿を書く作家たちを緩やかな結束の中に集めていったこと、そしてその過程において多くの評論文を書いたことが指摘できよう。その一方で沈從文は、文學作品の商業化とプロパガンダ化、とりわけ上海における左翼文學の壟斷と新文學の商業的墮落に對しては强い反感を抱いていた。

小島久代は、當時の沈從文が「その非政治的發言ゆえに、三度も文學論爭の種をまき、その渦中に卷き込まれ[15]」ることになった、と述べている。その發端に位置する「文學者的態度」は一九三三年十月に發表された。彼のこの文章が「京派對海派」の論爭を卷きおこしたことはよく知られている。沈從文の主張は、上海では一部の作家が出版社や新聞や雜誌に寄生し、北京では大學などの教育機關に寄生しているために、彼らにとっての文藝作品の創作が人生に對する嚴肅さを缺き、時流や商業的成功に阿った手慰みに過ぎぬものとなっていることへの批判であり、文學者は創作のプロとして、記念碑となる作品を書くために必要とされる經驗や知識や技能を身につけ、「この時代の廣範な苦悶の姿を記錄しながら、民族復興のための健康で滿ち足りた生命の力をはっきりと示す[16]」ような國語文學を書くべきである、というものだった。二回目の論爭の火種となったのは一九三六年十月の「作家閒需要一種新運動[17]」で、これがいわゆる「反差不多論爭[18]」を引きおこした。三度目は日中開戰後の一九三九年一月の「一般或特殊[19]」で、この文章は後に、建國前夜の沈從文に對する政治的批判の根據に結びついてゆく。（この「一般或特殊」については後で再度ふれたい。）そして以上のような論爭の種となった一連の文章を沈從文が發表した時期と、彼が教科書編纂事業に從事していた時期とはほぼぴったりと重なりあっている。

いずれの論爭においても沈從文の主張の中心は一貫しており、文學をもっぱら商品として考えたり、あるいは政治の道具と見るような作家の創作態度とそれを作家に强いる社會への批判だった。この意見の

大本には、當時の作家の社會的存在としてのあり方、すなわち職業作家の社會的身分や經濟的環境への不滿があったと思われる。

一方彼の論敵は、イデオロギー論爭を頑として受け付けようとしない沈從文や、その背後にあった文學者らをも含めた北方文壇の高踏的な傾向を、しばしば皮肉・批判を込めた「沈默」という言葉やそれに類する表現で揶揄していた。彼らにとって沈從文のこのような態度は「一九三〇年代において「非政治性」の持つ「政治性」[20]」を露わにするものであり、さらには文學を政治から斷絶させる「反動的」な作家のそれとしてしか映らなかった。ゆえに當然、論爭は最初から最後までまともに嚙み合うことはなく、結果的に、評論活動によって沈從文は自ずから特立獨行の立場に驅られていくのである。

二　「沈默」

一九三六年十一月に發表された「沈默[21]」は、文學論爭に關連付けてこれまであまり取り上げられることの無かった文章であるが、實は上に述べた沈從文の主張を別の論理で、つまり意見や批判といった外向きのものではなく、自己の立脚點を內向的・內省的に說明したり辯明したりするようなスタイルで表現したものであると感じ取れる。それは彼自身の「社會的身分」に關する述懷を底部に据えたものであった。ゆえに、教科書編纂事業が新しい段階に移ったこの時期に沈從文が置かれていた狀況を彼の內面から見る上で非常に重要であると思われる。[22]以下、原文に寄り添いながらこの文章を紹介したい。

私は二年間沈默していた。この沈默は、いくらか投げやりになったようでもあり、またいくらかはスランプに陷ったようにも見える。そのとおり。古人は〝餘業に深入りすれば本職に勵む氣が無くなる〟と言ったが、この二年の間、私はほぼある種の好みでもって自分を縛り續けてきたようなものだ。私のその嗜好とは、本性を抑えつけておくための重石のようなものであり、理想を刈り落とすための鋏のようでもある。私がそれを必要とするのは、そうしておくことで地面にぴったりと落ち着いていることができるし、虛無に陷ってしまうこともないからだ。[23]

ここには沈從文の理想と彼が實際に置かれていた現實とのギャップが述べられている。「ある種の好み」「嗜好」（原文は共に「癖好」）という言葉で述べられているのが、彼の作家意識における〝本職〟に對する〝餘業〟とも言うべき教科書編纂事業や副刊編集への位置付けであると考えられる。それらの作業に埋沒する日々を、創作家としての本性や理想の〝沈默〟なのだ、と表現しているのである。

この文章が書かれた一九三六年から二年を遡る間の沈從文の著作を數えると、三六年の作物は確かに少ない。恐らくは教科書と副刊の仕事に忙殺されていたのであろう。しかし一九三五年まで遡れば、それ以前と變わらぬ旺盛な執筆狀況を示している。特にこの時期の評論活動の活發さから考えるに、沈從文の言う〝沈默〟とは、字義どおりに使われているというより、むしろ創作に對する自己認識（自己の本職たる創作）と、社會的存在としての自己の現實（教科書編集や評論活動といった餘業）との間に齟齬が生じ、それが增大していることへのジレンマの謂ではなかったろうか。

彼が〝沈默〟の中で考える「本性」であり「理想」たる創作とは何か。それは、他者に追隨することなく、ただ自分の作品を「長く存在

させる」[24]ことである、という。そして、

作品が存在できるかどうかは讀者に頼るのだが、それは讀者を啓發できるかというところにかかっているのであって、讀者に對して媚びへつらうところにあるのではない。[25]

と述べる。これは全ての論爭における沈從文の「書くこと」の意味を示す、ほぼ一貫した言葉である。では、彼の書くべき本願とは何か。

私は、自分でなんとか頑張って一册の『聖書』を書かねばならないと思う。この經典を完成させるのは、多くの人々の天國に對する迷信を增すことにあるのではなく、人間の力が信ずるに足るものであることを説明することにある。[26]

一九三〇年代の評論活動の中で沈從文が主張してきたのは、民族や人類の歷史に殘る記念碑たる成果であり、長い生命を持つ經典たる作品であるところの、つまり彼の言う『聖書』を書くべき作家の「寡默な」あり方と、作家にそれを許す社會的環境の必要性であった。〝沈默〟の中で彼が考えていたこのような經典的作品については後述するが、それはいわゆる「載道」文學とは異なる意味であること、また當時の沈從文には、自己のその理想を實現できると確信させる根據が、つまりそういった作品を既に書き始めているという强い自負や、何をどう書いてゆくかという具體的な構想があったことを指摘しておきたい。

さらに〝沈默〟とは、前述の如く外部から與えられた批判の言葉そのものでもあった。それを自身が積極的に使うからには、當然のことながら自らの「寡默な」仕事に對する非難への反論、というはっきりとした意圖も込められていたであろう。〝沈默〟は彼の側から考えればむしろ饒舌であったと言える。

それでは沈從文の主張する、あるべき作家の姿と彼が實際に置かれていた狀況とはどのように食い違っていたのか。當時の彼の姿を客觀的に示す言葉として、上海で雜誌『現代』を編集していた作家施蟄存の次のような回想がある。

當時教育部に教材編審委員會が設立され、楊振聲が各級學校向けの國語教材の編集審査の責任者となり、ほどなく〔沈〕從文をそこでの仕事に招聘した。これによって從文は固定的な職を得て毎月の給料で生活を賄うことができた。しかし、このようになってから創作は逆に彼にとって業餘の仕事となったわけであり、彼の精神生活は主客轉倒の傾向を帶びることになった。そうして彼は時間を捻り出して創作に充てざるを得なくなり、いつも手紙には、自分の送った原稿は鼻血を流しながら書いたものだ、とあった。[27]

このような狀況を甘受せざるをえない自らの生き方に對する思いを、「沈默」で沈從文は以下のように開陳している。

私は、普通であれば人が中年となり生き方が內向的になってから歩むような裏道を歩んできた。少しばかり寂しく、少しばかり冷遇されてきたが、それでも他の人達と同じように「生き延びて」

きた。もしかしたらこのように「生き延びて」いくことは、他人から見れば「落伍して」いる、ということなのかもしれないが、そんなことはどうでもよい。[28]

二〇年代北京での赤貧洗うが如き習作期の賣文生活に耐え、國民革命後の上海で自分たちの理想を實現する出版社を興すことを目論んで挫折し大きな負債を抱えてしまった[29]沈從文は、端無くも大學での職を得られたことで大いに創作を發展させた。そしてその後に携わることになった教科書編纂事業という環境は、北京で生計を立て同時に文學活動を展開させることができたことで、當時の彼にとって魅力的な「身分」であったに違いない。しかし、その身分も創作生活においては、經濟的安定に見合う精神的滿足を與えてくれるものではなかったのである。

三　漂泊する大學

一九三七年七月七日、盧溝橋事件が勃發した。戰火は徐々に擴大し、七月末には北平・天津が日本軍によって占領された。沈從文は八月十一日夜、教育部からの「祕密通知[30]」を受け取ると、同じ通知を受けた數名と共に翌朝早く北平を離れた。不測の事態を避けようとして、各人はそれぞれ身分を隱すために變裝して旅立った[31]という。沈從文は家族を連れず單獨でこの逃避行に加わった。

北京が陷落し、八月十二日の早朝、私は北京大や清華大の親しい教師たちと共に北平・天津間に〔事變後〕最初に開通した列車に乘って天津へ行き、翌日フランス租界の宿泊先で朝刊を見てはじめて上海で既に戰火が上がっていたのを知った。我々の行く先は南京だったが、上海への海路はもう絶たれており、チャンスを待つしか無かった。〔中略〕全ては機運を計らねばならない。我々にあれこれ考える餘裕はなく、危險を冒して船に乘り込んだ。今でも憶えているのは、その時同船した知り合いの中に、美術學院の趙太侔夫妻、清華大學の謝文炳夫妻、北京大學の朱光潛教授、そして楊今甫〔振聲〕氏などがあったことだ。[32]

「祕密通知」がいかなる內容であったのかはわからない。しかし沈從文のこの記述から、大學教員に對する首都南京への避難指示だったことが想像できる。沈從文がこの通知を受け大學關係者と行動を共にすることになった事實から、やはり當時、彼らの教科書編纂事業が教育部の管轄であったことが確認できると同時に、當時は大學に所屬していなかった楊振聲の教育部における相當の地位を想像できよう。次に楊振聲の回想を見る。

北京大、清華大、南開大の三校が合同して長沙で臨時大學を開くというプランは盧溝橋事變後すぐに南京で釀成され、一九三七年八月に南京で臨時大學準備委員會が設立された。三校の學長が委員となるのは當然のこととして、その他に各校から一名ずつ加え、〔中略〕また教育部部長の王世杰が主任委員に、教育部次長の周炳琳が主任祕書〔事務責任者〕となった。私は事變後の八月二十六日に南京に着いたのであったが、その時、周炳琳氏が長沙に拔け出してくることがどうしてもできなかったために、清華と北京大のどちらにも緣が深く、南開にも友人が多いということで

私を彼の代わりに入れたのであった。こうして私は準備委員として梅月涵〔貽琦〕氏と共に長沙に赴いた。[33]

楊振聲は開戰による非常時の大學避難、遷移という狀況の中で、教育部教科書編纂事業の責任者[34]という立場から臨時大學設立準備における教育部代表の立場に入れ替わっていったのだった。彼が準備委員を任ぜられた三校合同の臨時大學は一九三七年十月に湖南省長沙で開校している。しかし、戰火は非常な速さで廣がった。十一月十二日には上海が日本軍に占領され、二十日には國民政府が重慶への遷都を通告し財務・外交・内政の各部は武漢へと移轉してゆく。そして十二月十三日に首都南京が陥落すると長沙臨時大學は翌年一月、教育部との協議によって次なる雲南省昆明への移轉を決定した。わずか二ヶ月あまり開講しただけで大學はさらに奥地へと避難する事態に陥ったのである。[35]

開戰によって戰場と化した中國は國土を複雜に分かたれ、[36]それらの境界が戰局によって不定形化したことによって、大學もまたそのあわいを漂泊する運命におかれた。しかし遷移による組織合同の混亂と成員離散の危機に呑まれながらも社會における新たな個性を逆境の中で編み出していく大學が生まれる。それが長沙から逃れ昆明で發足した西南聯合大學だった。

四　教科書編纂事業の結末

開戰直後の沈從文と教科書編纂事業に話を戻す。既に見たように教育部の「祕密通知」に從って日本軍占領下の北平から脱出した沈從文は八月末、苦勞して南京にたどり着いた。だが、南京は既に日本軍の爆撃を受けて混亂を極めており、すぐさま船で武漢へ逃れている。そして大學關係者らが長沙に臨時大學を作るため、武漢で陸路に換えて去った後、彼は「數人の友人と一緒にしばらく武漢で武漢大學の圖書館を借りて〔教科書編集の〕仕事をした[37]」。これは九月初旬のことであった。當時の狀況は蕭乾が回想錄に記している。

一九三七年「八一三」の後、全面抗戰の展開となり、私は『大公報』を解雇され「小樹葉」〔蕭乾の最初の妻〕と共に武漢に流れてきた。〔中略〕彼ら〔楊と沈〕は私たち二人の難民を受けいれてくれた。そして私も楊〔振聲〕先生が主宰する教科書執筆チームの臨時メンバーとなった。我々は最初珞珈山麓の家を借りた。〔中略〕私は普段は武漢大學圖書館で教材を選んだり解説を書いたりしていたが、空襲警報があると近くの茂みに大急ぎで潜り込んだ。[38]

この時期から教科書編集の中心になって實質的に全ての作業を進めたのは沈從文であった。[39]沈從文は一九三七年十二月三日付長兄宛の手紙で、武漢の日毎に激しくなる砲火について記している。彼は、あと二週間程で大學が閉鎖され教科書の仕事ができなくなるだろうと豫測し、その後の可能性について二つの選擇肢を擧げている。一つは武漢に留まり租界で身を隱すこと。もう一つは當時長兄の家のあった湘西沅陵に行き教科書の仕事を續けること。そして「たとえ仕事ができなくなっても、大學關係者の多くと共に避難し、貴州か雲南に行けるでしょう。もしも戰火が湘西に及ばなければたぶん鄉里でいくらかは仕事ができるでしょう。今、楊〔振聲〕氏に手紙で考えを打診中です[40]」と書いている。

十二月下旬、武漢大學が業務を停止し、沈從文、蕭乾らは長沙に逃れ楊振聲、朱自清と合流する。翌一九三八年一月には長沙臨時大學が昆明移轉を決定したことによって、教科書編纂チームも同地にその據を移すことになった。北方から南下した三大學は、日本軍統治地域から戰地をかいくぐり迂回を重ねてようやく內陸の長沙に臨時大學を開設したのだったが、再度、さらに奧地の雲南省へと漂ってゆく。移轉に際して大學當局は教職員學生に旅費を支辨し、海路を含むいくつかの經由地と到着地の昆明に事務所や宿泊施設の手配を行った。昆明での到着手續き期限は三月十五日とされた。

校務のため長沙に留まる楊振聲を殘して、一九三七年十二月に沈從文は蕭乾らと共に昆明に向かったが、途中湘西沅陵に滯在することになる。この時沈從文は故鄕湘西への旅途と沅陵で舊交を溫め、新知を得、大いに見聞を廣めた。沅陵では三ヶ月餘りを過ごし、翌一九三八年四月末昆明に到着している。北平から三千キロ以上の道程と八ヶ月に及ぶ流亡の果てに、教科書編纂事業の據點もようやくこの地に漂着したのだった。沈從文は後に「北から南への、この旅の經驗によって、もはや全國家的な戰爭の意味についてはっきりと理解した[41]」と記した。

この長い漂泊の後、紀行集『湘西[42]』と小說「長河[43]」が執筆された。これらの創作こそ、湘西の過去から現在における變貌をつぶさに描くものであって、特に長編小說「長河」は、一九三四年の「邊城」發表時に沈從文自らが「これ〔「邊城」〕のみにとどまらず、更に比較對照する機會を彼ら〔讀者〕に與えようと計畫している[44]」と記したモチーフそのものの具現であり、〝沈默〟の中で培われた「聖書」執筆への思いを果たす作品なのであった。

他方、昆明に移轉した長沙臨時大學は、一九三八年四月二日、正式に國立西南聯合大學となる。楊振聲は大學總務長（代行）兼文學院中文系教授となり、朱自清は中文系主任となった。

一九三八年十一月には北平から沈從文の家族も昆明に到着し、この後、沈從文一家の昆明での暮らしは四六年七月まで續く。沈從文の妻張兆和の妹、張充和も一九三八年末に、やはり昆明に避難しており、三九年頃の樣子を以下のように回想している。

> その頃沈二哥〔從文〕は、〔中略〕まだ教科書の編集も續けており、その場所は青雲街六號だった。楊振聲がリーダーだったが彼はいつも來るわけではなかった。朱自清はおよそ週に一、二度だった。沈二哥、汪和宗と私はいつもその小さな建物にいた。沈二哥が總編集で小說は彼が選び、朱自清は散文を、私は散曲を少し選んでは注釋を施し、汪和宗がそれらを筆寫した[46]。

ところで、一九三九年五月頃、教科書編纂事業に對して教育部から何らかの通達があったと思しい。朱自清の日記（五月十二日）には「沈〔從文〕の奧さんが言うには、教育委員會から教科書を完成させよとの催促の手紙があったとのことだ[47]」とある。その三日後（五月十五日）長兄への手紙に沈從文は、「〔教科書の〕仕事は今年いっぱいで終わりになり、その先に繼續されることはありません。これから出來そうな生活の方法を考えるに、新聞〔副刊〕を編集するか、教師になるか、戰地に行ってどこかの軍隊に取材に行くか、故鄕へ歸って作品を書いてゆくか、というところでしょうか。個人的な興味から言えば色んな所へ行ってみたいですが、子供たちの都合を考えれば教師にならないといけませんし、多くの讀者のためを思えば文章を書かねばなりませ

ん。もしかしたら今書いたどの方法も實現しないかもしれません。最後はやはり天命に従うのみです[48]」と綴った。

果たせるかな、時を置かずして轉機が訪れる。翌月六日の日記に朱自清はこう書いている。「今甫〔楊振聲〕が沈從文を師範學院の教師として招いてはどうか、と提案した。しかしそれはとても難しいだろう[49]」。同月十二日には朱自清による根回しが始まった。「朝、莘田〔羅常培〕を訪ね〔沈〕從文を助教にすること〔中略〕について相談する。結果は上々だった[50]」。そして朱自清は十六日には早くも、「〔沈〕從文は西南聯大師範學院講師の職務に就くことに同意した[51]」と記している。以上は西南聯合大學に沈從文が就職するに至った經緯を關係者の立場から示す唯一の資料であるが、朱自清の記述は驚くほどにあっけない。

この人事決定過程の背景には二つの要素があったと思われる。一つは人事を掌った西南聯合大學中文系という組織に關わるものである。朱自清はその母體となった清華大學中文系の主任であり長沙臨時大學でも引き續き主任を務めていた。それは西南聯合大學となってからも同様であったが、一九三九年十一月に病氣のため羅常培と臨時交代し、その後の四一年に羅が病氣になった際には楊振聲がその責を負っている[52]。つまり朱、羅、楊は西南聯合大學中文系のトップに位置する三人であったわけで、この三者の合意が中文系全體の人事の要になっていたであろうことは容易に想像できる。また沈從文が所屬することになる師範學院は、西南聯合大學成立後に教育部の下命によって增設された新しい組織であり、合同したとは言え人事においては元の三校のそれぞれのポストが尊重されていたという[53]西南聯合大學にあって、例外的に中文系獨自の人事權が行使できたのであろう。

もう一つは、一九二八年に清華大學が國立化された時、初代中文系主任として赴任した楊振聲と、彼と共に新文學の學問的制度の基礎を打ち立てようと盡力した朱自清との關係、そこで二人が共有していたであろう一つの意識にあっただろう。その後、一九三〇年に新設された青島大學の初代學長となった楊振聲が、學歴を持たぬ沈從文を、作家としての水際立った創作能力を見込んで中文系講師として招聘した意圖も、やはり大學における「新文學アカデミズム」の確立にあったのであり、楊、朱、沈による六年に及ぶ國語教科書編纂事業を經た後、西南聯合大學で楊と朱が沈從文を彼らの「大學中文系」にすぐさま招き入れたことはむしろごく自然の成り行きではなかったか。

かくして沈從文は、一九三九年八月、西南聯合大學師範學院國文學系[54]副教授となった。以後、彼は大學で新文學創作を教授するという、中華民國の作家としては特別なポジションを確保し、そこから獨自の文學觀と實驗性を帶びた多くの作品を生み出して行くのである[55]。

さて、彼らの中學國語教科書編集はどうなっただろうか。一九三九年春から秋にかけて、朱自清の日記には編集作業に關わる記述が繁く竝ぶ。完成追い込みの時期だったのだろう。いくつか拔き出してみよう。五月十六日「教科書の最後の課文が完成した[56]」、十八日「教科書の中の文章に注釋を書くために丸一日を要した[57]」、八月二日「楊〔振聲〕と教科書編集の問題について相談[58]」、二十六日「午前中、今甫〔楊振聲〕、〔沈〕從文と教科書第一册及び第二册の目次を書く[59]」、九月二日「教科書第一册を檢査する[60]」、八日「第五册と第六册の教科書目次が出來上がる[61]」、三十日「教科書第三册と第四册をチェックする、いくつかの注は頗る良い出來だ[62]」、そして、十月六日には「教科書第五、六册をチェックし終わる[63]」とあって、以降、編集に關する記述は見えない。そしてこの年の暮、十二月二十九日の日記に「沈從文氏を訪う。彼は

教科書編集の給料の一部をくれた。七十元あった[64]」、翌四〇年一月五日に「〔沈〕從文が給料を持ってきた[65]」とあるので、一九三九年をもって、少なくとも朱自清のこの仕事への分擔は終了したであろうことが想像できる。ただ沈從文は、翌一九四〇年五月七日付長兄への手紙に「私たちは六月の半ばにはたぶん授業が終了するでしょう。でも休みになったら教科書の編集を急がなくてはなりません[66]」と書いており、あるいは四〇年の中頃まで編集の完成は長引いたのかもしれない。

戰爭による艱難辛苦の中でかくも粘り強く編集作業が繼續された彼らの中學國語教科書であったが、結局出版されることはなかった。現在まで原稿や記錄も見つかっておらず、この教科書にどのような作品が採られたかなどの具體的なことはよくわかっていない。梁實秋の一九八五年の回想を見よう。

> 抗日戰線が國民政府統治地區に達した頃、教育部部長は陳立夫氏だった。彼は抗戰用の教科書を編集すべきだと言い、そこで〔中略〕沈從文が編集したものを私に讀ませて判斷させた。私が讀んだものは良く編まれていたが程度が高すぎ、なおかつ抗戰用のものでもなかったために、教育部次長だった張道藩の主宰によって別の教科書が編まれることになった。私が小中學校用の國語教科書を編集し、當時は皆がそれを使い、沈從文〔中略〕が編集した方は採られなかった。彼らの編んだものは、當時の狀況に合わなかっただけのことで、やはり出版できたはずであり、それが出版されなかったのは實に殘念だったと思う[67]。

この言に據れば、沈從文らの編んだ國語教科書の內容は對日抗戰における當時の國民政府プロパガンダに卽したものではなかったようである。

梁實秋は一九三八年十月に「教育部教科書編輯委員會委員（中小學教科書組主任）」となっている[68]。それは開戰後の一九三八年一月に教育部が改組され、六月に當時教育部次長だった張道藩が（恐らくは楊振聲の後を襲って）「教育部教科用書編輯委員會主任」を兼任することになったからなのであった[69]。梁實秋の關わった國語教科書は民國における初の國定本として一九四二年に發行された[70]。

結　沈默と漂泊

教科書編纂事業が戰火の中を流亡する間、沈從文の前には何度か岐路があらわれた。彼はその都度、進路の可能性をいくつかの選擇肢として考えている。既に見たように最初は一九三七年末の武漢で。次には教育部から教科書編纂事業の終結が示されたと思しき一九三九年の昆明で。武漢では結局留まることも、また湘西への避難も選ばず（たぶん楊振聲の指示に從ってであろう）大學のあった長沙へ漂うように逃れた。昆明では文藝副刊の編集も、前線へ取材に赴くことも、故鄕に歸臥することも選ばず、教科書編纂チームの用意した大學教師のポストに身を委ねていった。

教科書編纂事業が教育部による正式の事業として動き始めていた頃、沈從文は「沈默」を著した。そこで述べられた開戰前の〝沈默〟は自らの身分や環境に對する內面の不滿を反映した消極的なニュアンスを持つ言葉であると同時に左翼陣營の政治的多辯に對するアンチテーゼであり、「寡默」な己の立場の辯明でもあった。またこの〝沈默〟の裏には創作家としての竝々ならぬ自負が存在しており、「聖書」執筆

への信念に支えられた矜持の表れであったとも言える。

戰爭が始まるや、教科書編纂事業は沈從文に、ついには大陸を縱斷する程の漂泊を促した。この漂泊は彼に故郷湘西への旅と「聖書」執筆の機會を與え、そこで『長河』が生み出された。ところが、この長編小說は最初の第一部が發表された時、當局による審査差し押さえという事實上の發禁を受ける憂き目に遭い、一九四五年になってようやく單行本として出版された際にも大幅な削除を餘儀なくされ、結果として第二部以下は書き繼がれることなく、彼の構想そのものが實現したとはとても言えなかった。こうした狀況の中で、沈從文の〝沈默〟は、ある積極的な意味を生じ響きを轉じていったように見える。

一九三九年一月、西南聯合大學で發行された雜誌『今日評論』に發表された「一般或特殊」で沈從文は、全ての文學は抗戰に奉仕すべきであるという時局の要求に對して獨自の立場から異議を唱えている。

〔抗戰のための〕宣傳性を持たない仕事、沈默のまま努力する必要があり、なおかつさらに時間と辛抱を要する仕事は、どれもみな誤解されやすく皮肉の對象とされやすい。〔中略〕社會の本當の意味での進步は、たぶんやはり職務の上で特殊性を有している專門家たちや、態度の上で寡默な作家たちが、各々の力を盡くすことによって完成されるのではないか。〔中略〕そのような沈默の中で身を粉にする態度は、現在のところ、やはり特殊なものと言うしかないが、それが未來においては一般となることを望んでやまない。[71]

戰局が長期化を呈し、國民政府がすでに消耗戰略へ移行していたこの時期にあって、沈從文の〝沈默〟は、自らの使命に沒頭する「專門家」として時局と一定の距離を保ち、それによって創作者の孤壘を守ろうとする意志を表明する言葉になっていたのである。

日中交戰時期における沈從文の漂泊を見た時、それは恰も、一六歲から地方軍閥の兵士として湘西各地を轉々としたあげく單身北京に「學問」を求めて出立し、その後各地で樣々の紆餘曲折を經ながらも作家として激動の民國社會を「生き延びて」きた彼の內面の軌跡をなぞるものであったように感じられる。[72] 邊境の町から上京した沈從文は、二〇年代の北京で、その出自に起因する複雜な、そして根深い抑鬱を抱え込み、そこから獨特の自我[73]を形成していった。自らの經驗と一本の筆を賴りに作家としての運命を切り拓いてきた彼は、その特異なアイデンティティを受け容れ、卓越した創作能力を支え、それに正當な評價を與えるような環境を終始求めていたが、民國社會にその身の置所、自負を落ち着かせる場處を見いだせずさまよい續けてきたのであった。

教科書編纂事業への參與は創作者としての彼に必ずしも內面の充足を與えるものではなかった。しかし楊振聲・朱自清との六年間にわたる協働は、彼の經濟的基盤となり、日中開戰後の社會的混亂の中で、沈從文をして西南聯合大學中文系という一九四〇年代中國における「新文學アカデミズム」の砦に腰を据えさせる機緣となったのである。

このことの持つ意味を彼の內側から餘すところ無く跡付けることは、本稿の手に餘る。ただ、これまで論じてきたように、戰亂による流離の中で人生の岐路を前にした時、沈從文が常に教科書編纂事業、そして遷移する大學と運命を共にしていったことから、彼の根底に存在したであろう「自負」と「自卑」の相克する有り樣をやはり感じずには

おられないのである。

注

(1) その經緯と編集作業の實際については、拙稿「自負と自卑 沈從文の民國國語教科書編纂事業への關わりについて」(『野草』九四、二〇一四年八月)および「作家たちの編んだ國語教科書〔1〕〜〔5〕」(『中國文藝研究會會報』三九三〜三九八號、二〇一四年七〜十二月)を參照。

(2) 羅崗「文學教育與文學史 中國現代〝文學〟觀念建構的一個側面」(『今天』一九九五年第四期)のまとめるところでは、一九二二年に周作人が胡適の紹介を受け燕京大學で初めて「中國文學系の新文學クラス」を擔當したことから始まり、一九二八年に楊振聲が清華大學中文系の主任として「中國新文學研究」等の授業を開設し朱自清とともにこの道を開拓したこと、一九三一年北京大學中國文學系で胡適が「新文學試作」のカリキュラムを考案し、周作人に具體的な授業計畫を求め、周が徐志摩らに授業を擔當させたことを經て、一九三八年に教育部が朱自清らに「大學中文系」科目の草案を依頼し、これが一九三九年「分系必修選修科目表」として定められたことで「〝新文學〟はこれで正式に大學の奥深くに到達したと言えよう(至此,〝新文學〟可謂在大學裡正式登〝堂〟入〝室〟)」。(參照・引用は李陀編選『昨天的故事 關於重寫文學史』生活・讀書・新知三聯書店、二〇一一年、一六五〜一六七頁)本稿では、いわゆる「新文學」のこのような流れを「新文學アカデミズム」の成立とみなしている。

(3) 大學當局による學生管理、及び滿洲事變に對する政府政策への批判を目的とした學生運動によって生じた混亂を收めるため、一九三二年七月教育部は青島大學を解散するに至った。(劉增人・王煥良主編『青島高等教育史(現代卷)』人民出版社、二〇〇八年、一三六〜一四二頁を參照)

(4) 同注(1)、「自負と自卑 沈從文の民國國語教科書編纂事業への關わりについて」を參照。

(5) 盧勇「早期抗戰的重要機構 國防設計委員會述略」(中國社會科學院近代史研究所『抗日戰爭研究』七三、二〇〇九年、第三期)

(6) 一九三六年十月發行九版〔八月初版〕の端書には、この書は元々「資源委員會」の編集によるものであったが、「本館」が「時代の需要にすこぶる適應できる(頗能適應時代之需要)」と認めたため「該會の同意」を得て「本館主編の教科書」として採用したことを特記聲明する旨が謝意と共に記されている。

(7) 「日記(上)」朱喬森編『朱自清全集』(九)日記編、江蘇教育出版社、一九九七年、四二二頁。「下午進城,遇新自南方歸來的沈從文,謂楊代表教育部與正中、商務、中華、世界簽訂合同。四書店五年內每年提供編輯費二萬圓云。」

(8) この契約の背景として、滿洲事變後、教育部に教科書國定化への動きがあったことが重要と思われる。

(9) 「從文自傳」は一九三二年に青島大學で執筆されたが、出版されたのは一九三四年七月(第一出版社)であった。

(10) 檜山久雄「太古への鄉愁」『現代中國文學全集月報』(9)、河出書房、一九五四年、一頁。

(11) 沈從文「『湘西散記』序」(『讀書』第二期、一九八二年二月。引用は『沈從文全集』第十六卷、北嶽文藝出版社、二〇〇二年、三八七頁)「正是我學習用筆比較成熟,也是我一生生命力最旺盛的那幾年。」

(12) 藤井省三、大木康『新しい中國文學史』ミネルヴァ書房、一九九七年、一六四頁。

(13) この段落の、一九二〇年代末から三〇年代前半の中國社會における知識人の有り様とその言論活動の政治化については、石川禎浩『革命とナショナリズム 1925–1945 シリーズ中國現代史③』岩波新書、八二～九八頁を參照した。

(14) 『大公報・文藝副刊』の編集委員は楊振聲、沈從文、朱自清、林徽因、鄧以蟄、周作人であったが、實際の編集作業は沈從文が擔った。沈從文の文學觀の『大公報・文藝副刊』編集への反映については、劉淑玲『『大公報』與中國現代文學』（河北教育出版社、二〇〇四年）の第二章「〝文藝副刊〟與京派作家群：輝煌的30年代（1935–1937）」に詳しい。

(15) 「魯迅と沈從文「文學者的態度」から「七論〝文人相輕〟—兩傷」まで」『沈從文 人と作品』汲古書院、一九九七年六月、二六四頁。

(16) 「文學者的態度」『大公報・文藝副刊』（天津）第八期、一九三三年十月十八日（引用は前掲『沈從文全集』第十七卷、五〇頁）「一面記錄了這時代廣泛苦悶姿態，一面也就將顯示出民族復興的健康與快樂生機」

(17) 『大公報・文藝』（天津）一九三六年十月二五日、署名は炯之。

(18) この論爭における沈從文の立場を論じたものに、尾崎文昭「「反差不多論爭」（一九三七年）に見る沈從文と南北文壇の位置關係」（『東洋文化』六五、一九八五年三月）がある。

(19) 『今日評論』第一卷第四期、一九三九年一月二二日（前掲『沈從文全集』第十七卷、二六〇～二六四頁）

(20) 今村與志雄「解說」『魯迅全集 八 且介亭雜文・且介亭雜文二集・且介亭雜文末集』學習研究社、一九八四年、七三四頁。

(21) 『文季月刊』第一卷第六期、一九三六年十一月（前掲『沈從文全集』第十四卷、一〇四～一〇八頁）

(22) 錢理群は、沈從文のこの時の〝沈默〟は、沈の四〇年代の創作上に生じた大きな變化を準備するものだったと述べている。（『1948：天地玄黃』山東教育出版社、一九九八年、二四九頁）

(23) 同注(21)、一〇四頁。「我沈默了兩年。這沈默顯得近於有點自棄，有點衰老。是的。古人說：〝玩物喪志〟，兩年來我似乎就在用某種癖好繫住自己。我的癖好近於壓制性靈的碇石，鉸殘理想的剪子。需要它，我纔能夠貼近地面，不至於轉入虛無。」

(24) 同注(21)、一〇七頁。「希望它長久存在」

(25) 同注(21)、一〇七頁。「作品能存在，仰賴讀者，然對讀者在乎啓發，不在乎媚悅。」

(26) 同注(21)、一〇八頁。「我覺得我應當努力來寫一本《聖經》了，這經典的完成，不在增加多數人對於天國的迷信，卻在說明人力的可信。」

(27) 「滇雲浦雨話從文」（吉首大學沈從文研究室『長河不盡流 懷念沈從文先生』湖南文藝出版社、一九八八年、四九頁）「當時教育部成立一個教材編審委員會，楊振聲負責編審各級學校語文教材，就延聘從文在那裡工作。由此，從文有了一個固定的職業，有月薪可以應付生活。但這樣一來，寫作就成爲他的業餘事務，在他的精神生活上，有些主客顚倒。於是他不得不擠出時間來從事寫作，常常在信裡說，他寄我的稿子是流著鼻血寫的。」

(28) 同注(21)、一〇四頁。「我走了一條近於一般中年人生活內斂以後所走的僻路。寂寞一點，冷落一點，然而同別人一樣是〝生存〟。或者這種生存從別人看來叫做〝落後〟，那無關係。」

(29) 上海における沈從文・胡也頻・丁玲による雜誌出版事業については、吉田富夫「雜誌『紅黑』」『中國文學報』第五〇册、一九九五年四月を參照。

(30) 沈虎雛編「沈從文年表簡編」前掲『沈從文全集』附卷、二一頁。

(31) 吳世勇編『沈從文年譜（1902–1988）』天津人民出版社、二〇〇六年、一九一頁。なお本稿の沈從文に關する經歷事歷事項は主として此書に據

った。

(32) 同注(11)、三九一頁。「北京陷落，八月十二日大清早，我和北大、清華兩校一些相熟教師，搭第一次平津通車過天津，第二天在法租界一個住處，見早報纔知道上海方面已發生戰事。我們的終點原是南京，由海船去上海路線以斷絶，只好等待機會。〔……〕一切得看氣運。我們無從較多考慮，都冒險上了船。還記得同艙熟人中有美術學院趙太侔夫婦、清華大學謝文炳夫婦、北大朱光潛教授、楊今甫先生等等。」

(33) 「北大在長沙」『北京大學五十周年紀念特刊』(*Special issue in commemoration of the fiftieth anniversary of Peking University = Pei-ching ta-hsüeh wu-shih chou-nien chi-nien t'e-k'an*, Center for Chinese Research Materials, Association of Research Libraries, 1970) 三三頁。「合北大，清華，南開三校在長沙設立臨時大學，七七事變後，此議即醞釀于南京，二十六年八月間在南京成立臨時大學籌備委員會。除三校校長爲當然委員外，每校各加一人，〔……〕又以教育部部長王世杰爲主任委員，教育部次長周炳琳爲主任祕書。我是事變後八月二十六日到的南京。因爲周炳琳先生當時不得脱身去長沙，我與清華北大都有淵源，南開也多朋友，才把我代替了他。於是我以籌備委員的資格於九月初與梅月涵先生到了長沙。」

(34) 一九三六年七月より「教育部教科用書編輯委員會」に屬していたらしい。(王由青『張道藩的文宦生涯』團結出版社、二〇〇八年、一一九頁)

(35) 長沙臨時大學及び西南聯合大學成立の經緯や狀況などについては、西南聯合大學北京校友會編『國立西南聯合大學校史(修訂版)一九三七至一九四六年的北大、清華、南開』(北京大學出版社、二〇〇六年)、楠原俊代『日中戰爭期における中國知識人研究 もうひとつの長征・國立西南聯合大學への道』(研文出版、一九九七年)等を參照した。

(36) 姫田光義「總論 日中戰爭期、中國の地域政權と日本の統治」(姫田光義、山田辰雄編)『日中戰爭の國際共同研究1・中國の地域政權と日本の統治』慶應義塾大學出版會、二〇〇六年、六頁。

(37) 同注(11)、三九一頁。「我就和幾個朋友暫留武漢借武大圖書館工作。」

(38) 「他是不應被遺忘的 懷念楊振聲師」『瞭望』一九九三年第一期、三七頁。「一九三七年〝八一三〟後全面抗戰開展，我被《大公報》遣散了，就偕〝小樹葉〟流落到武漢。〔……〕他們收容了我們這對難民。我也就成了楊先生主持的教科書寫作班子的一名臨時成員。我們先在珞珈山脚下租了一幢住房。〔……〕平時我去武漢大學圖書館選教材並寫講解。遇到拉警報，就跑進附近小樹林躲空襲。」

(39) 同注(31)、一九六頁。

(40) 「復沈雲麓 19371203 武昌」前掲『沈從文全集』第十八卷、二七二頁。「縱不能工作，還可隨同大部分辦教育的向上退，上貴州或雲南。戰事若不到湘西，我也許還可以在本鄉做點事，服服務。目前在聽楊先生來信，看什麼辦法好一些，妥當一些。」

(41) 「『湖南的西北角』序言」『益世報・文學週刊』一九四七年八月二日(引用は前掲『沈從文全集』第十六卷、三五三頁)「由北而南一段旅行經驗，已明白全國性戰爭意義。」

(42) 『湘西』に收められた諸篇は一九三八年八月から十一月まで香港『大公報・文藝』に連載發表された。

(43) 「長河」は一九三八年八月から十一月まで香港『星島日報・星座』に連載發表された。

(44) 「題記」『大公報・文藝副刊』第六一期、一九三四年四月二五日。(引用は前掲『沈從文全集』第八卷、五九頁)「我並不即此而止，還預備給他們一種對照的機會」

(45) 「金元時代に流行した韻文歌曲の形式」。(尾崎雄二郎、竺沙雅章、戸川芳郎編『中國文化史大事典』〔執筆は金文京〕大修館書店、二〇一三年、

四五三頁）

(46) 「三姐夫沈二哥」『海内外』二八、一九八〇年。引用は荒蕪編『我所認識的沈從文』嶽麓書社、一九八六年、九頁。「那時沈二哥〔……〕仍還繼續兼編教科用書，地點在青雲街六號。楊振聲領首，但他不常來。朱自清約一周來一二次。沈二哥、汪和宗與我經常在那小樓上。沈二哥是總編輯，歸他選小說，朱自清選散文，我選點散曲，兼做注解，汪和宗抄寫。」

(47) 「日記（下）」（朱喬森編『朱自清全集』（十）日記編、江蘇教育出版社、一九九八年、二四頁）「沈太太告以教育委員會函催完成教科書。」

(48) 「致沈雲麓 19390515 昆明」（前掲『沈從文全集』第十八卷、三六七～八頁）「工作年底即告結束，將來必不繼續。預計可作數種生活法，或編報，或教書，或上前方到任何一軍去看看，或回鄉住下來，寫點文章。論個人趣味我想到處走走，爲孩子便利我得教書，爲萬千讀書人計，我得寫文章。或許上述各辦法均無從實現，末了還是聽天由命。」

(49) 同注(47)、二八頁。「今甫提議聘請沈從文爲師院教師，甚困難。」

(50) 同注(47)、三一頁。「早，訪莘田，商談以從文爲助教〔……〕結果甚滿意。」

(51) 同注(47)、三二頁。「從文同意任聯大師院講師之職務。」

(52) 同注(35)、『國立西南聯合大學校史（修訂版）一九三七至一九四六年的北大、清華、南開』八九頁。

(53) 尾崎文昭「王瑤インタビュー 西南連合大學の思い出」（『鄙其山』七、一九八五年三月、三頁）

(54) 師範學院國文學系は主任以下の主要な成員を文學院中文系教員が兼任していた。（同注(35)、『國立西南聯合大學校史（修訂版）一九三七至一九四六年的北大、清華、南開』三〇四頁）

(55) 西南聯合大學教員となった沈從文については稿を改めて論じたい。

(56) 同注(47)、二五頁。「完成教科書的最後一篇課文。」

(57) 同注(47)、二五頁。「爲教科書內文章做注解，花了一整天」

(58) 同注(47)、三九頁。「與楊商談教科書編輯問題。」

(59) 同注(47)、四三頁。「上午與今甫、從文定教科書第一本與第二本目錄。」

(60) 同注(47)、四四頁。「檢查教科書第一册。」

(61) 同注(47)、四六頁。「作好第五册與第六册教科書目錄。」

(62) 同注(47)、五〇頁。「審查教科書第三册及第四册，有些注釋頗好。」

(63) 同注(47)、五一頁。「審完教科書第五、六册。」

(64) 同注(47)、七二頁。「訪沈從文先生，他交來了一部分編寫教科書的薪水，爲數七十元。」

(65) 同注(47)、七四頁。「從文帶來月薪。」

(66) 「致沈雲麓 19400507 昆明」前掲『沈從文全集』第十八卷、三八四頁。「我們六月半即或可能結束課程，假中要趕編教科書。」

(67) 「憶沈從文」『聯合文學』第二七期、一九八七年一月。引用は陳子善編『梁實秋文學回憶錄』嶽麓書社、一九八九年、三八三頁。「抗戰到後方，教育部長是陳立夫先生。他說要編一套抗戰用的教科書，於是把〔……〕沈從文編的給我看。我看了是編得很好，可是程度高，而且也不是抗戰用的，就由教育次長張道藩主持另編一套。我編中小學國文課本部分，那時大家都用，沈從文〔……〕編的那套就放著。我覺得他們編的只是當時不適用，還是可以印出來，沒有印出來很可惜。」

(68) 盧西奇『梁實秋傳』中央民族大學出版社、一九九六年、二七二頁。

(69) 同注(34)、『張道藩的文宦生涯』一一九～一二〇頁。

(70) 陳必祥編『中國現代語文教育發展史』雲南教育出版社、一九八七年、一五七頁。（執筆は顧黃初）

(71) 同注(19)、二六四頁。「一切無宣傳性的工作，需沈默努力而且更需時間和耐心的工作，都容易被誤解，受奚落。〔……〕不過社會眞正的進步，

也許還是一些在工作上具特殊性的專門家，在態度上是無言者的作家，各盡所能來完成的。〔……〕這種沈默苦幹的態度，在如今可說還是特殊的，希望它在未來是一般的。」

(72) 沈從文は戰時下の日々を「ひどく長く、ひどく寂しく、ひどく辛い（相當長，相當寂寞，相當苦辛）」人生の旅程であったと回想している。（「從現實學習」前掲『沈從文全集』第十三卷、三八九頁）

(73) 拙稿「〝鄉下人〟とは何か 沈從文と民族意識」『野草』四八、一九九一年八月を參照。